

講演会 & ライブ な日々 ②②

古川 秀明

就労継続支援A型施設でのオープンダイアログ & ライブ

就労継続支援A型施設は、障害や難病のある方が、雇用契約を結んだ上で一定の支援がある職場で働く事ができる福祉サービスです。

障害や病気に理解のある職場スタッフがサポートしてくれるので、安定的な就労が期待できます。

それなら安心して長期に働けると思うのですが、障害や病気を抱える人達の全てが定着するわけではありません。

A型施設でも続けられない人もたくさんおられます。

それでも何とか、ここで頑張られている方もおられます。

今回はあるA型施設で、親の会のオープンダイアログを実施しました。

話し合うテーマは「親が死んだあとの子どもの行く末」です。

A型施設の平均給与は7万円前後です。

働く人のほとんどは親と同居しているか、親の援助を受けて暮らしています。

小さい頃からずっと我が子の障害や病気と向き合い、頑張ってきた親も高齢化します。

子どもが40代になると、親は70代になり、親亡き後の子どもの将来が心配になります。

この子に家や財産の管理はとても無理、さりとて、この子のきょうだいに面倒を見てもらうのも忍びない。

子どもよりほんの一日だけでもいいから、長生きして死にたい。

「親亡き後の子どもの将来」についての不安は、私が福祉施設で勤めていた35年前からありました。

施設での保護者会の度にその話題が出ていました。

様々な福祉や社会システムは変化しても、障害や病気を持つ子どもの親が抱える心配は、今も昔も変わらないようです。

当時は、親御さんの多くが「入所型生活更生施設」の建設を望んでおられました。

そこに入所できれば、親が死んだ後もずっとその施設で面倒を見てもらえる。

つまり、入所型の施設こそ、親亡き後の、最後の切り札でした。

現在はノーマライゼーションの考え方の普及や、福祉予算の削減から、入所施設の建設は減少し、グループホームやA型施設や就労移行支援による在宅でのケアが主流です。

そうなる、また親亡きあとの心配が始まります。

結局ぐるっと回って振り出しに戻った感じでしょうか。

話はどんどん弾んで行きました。

決定的な答えは出ませんでしたでしたが、話し合う前のネガティブな考えから少しだけ前進したような気がします。

みんなで対話した後は、コーヒーとケーキを頂きながら、私のライブです。

今回は私一人のギター一本での弾き語りです。

もともとこのスタイルで歌っていたので、なんだか懐かしい。

リクエスト曲をたくさん頂きました。

だいたい60年代にヒットした昭和の流行歌です。

歌っているうちに、ちょっと流しになった気持ちになれました。

一番最後は、私のオリジナル曲の「タダタンタント」で締めます。

気持ちが楽になりましたという感想をいただき、歌って良かったなとおもいました。

シンガーソングライター
ふるかわひであき